

幼児の自然体験活動指導者養成研修

1. 参加者

| 募集人数 | 応募者数 | 参加決定数 | 参加者数 |
|------|------|-------|-------------------------------|
| 20名 | 17名 | 17名 | 15名 (福井10名、愛知3名、京都1名、岐阜1名) |

2. 事業内容（概要）

◆ねらい

- ・自然体験を通して、自然を知り、自然に興味を持つ機会を提供する。
- ・自然に関するスキル（海の活動やキャンプ）を高める機会を提供する。
- ・子どもと自然との関係、教育における自然体験の意味を深める機会を

◆期日・期間

2018年7月26日（木）～ 7月27日（金） 1泊2日

◆主催

若狭の海湖山から「体験の風をおこそう」運動推進実行委員会

◆参加者分析

毎年、小浜市の幼稚園、保育所、認定こども園および、小浜市子ども未来課との連携により、各園から1名程度の参加をお願いしている。本年度は特に、保育士の不足により、小浜市子ども未来課が中心となり、職員の出勤体制を調整していただき、11名の申込があった。規模の大きな園からは2名参加いただいた園もあった。そのうち2名が欠席となってしまう9名の参加となったが、普段の業務もある中で、積極的に参加をいただいていることは非常にありがたい。その他の2名については、近隣市町の保育所等に勤務する先生である。

また、愛知から2名、岐阜から1名、学校の先生からの参加があった。愛知からの2名は東海市国内指定研修の受講者であり、毎年、東海市教育委員会が本事業を研修の一つとして対象の先生方に紹介していただいている。

このように、教員の参加も積極的に受け入れていきたいと考えている。幼小・保小接続がさげばれている今日、自然の中で、保育所の先生方と学校の先生方が集い、同じ体験をする中で、互いに対する理解が深まるのではないかと考えている。本年度は、小浜市の協力を得て、小学校の校長先生方が集まる場で広報させていただいた。しかしながら、広報させていただく時期が遅すぎってしまった。学校教員に届くためには、年度当初からの広報をしていくべきであった。

また、1名だけであるが、青少年教育施設職員の参加もあった。体験型の指導者養成研修という本事業の特色やその重要性を知ってもらうためにも、青少年教育施設職員の参加があることは望ましい。

今後も、本事業には、幼小・保小接続という視点を持ちながら、幼児教育関係者と学校教育関係者の両方を参加者のターゲットに据えていきたい。その際には、小浜市とのこれまでの連携を大切にしてメインのターゲットとしつつ、近隣若狭町、高浜町といった幼児の事業で連携している町や敦賀市などの周辺市町との連携を模索することも考えていくこととしたい。

◆企画のポイント

◇プログラム

| | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
|----------|-----------------------------------|---|-----------------------|------------------|----------------------------------|----|---------------|------------------------|-------------------------|----|---|----|--------------------------------|----|----|----|
| 7月26日(木) | 受付 | | | オリエンテーション 開講式 | 「自然体験活動の技術Ⅰ」 シーカヤック・ 天気の見方 | | 昼食(弁当)・ 休息 | シーカヤックで海を渡る・ 無人浜へ | 「自然体験活動の技術Ⅱ」 スノーケリング | | 「自然体験活動の技術Ⅲ」 テント設営・アウトドアクッキング① (夕食作り) | | 「活動のふりかえり①」 自然体験・ 教育について | | 就寝 | |
| 7月27日(金) | アウトドアクッキング② (朝食作り) 鳥の声で目覚める | | シーカヤックで海を渡る・ 自然の家へ | | 「自然体験活動Ⅳ」 スノーケリング | | 昼食(弁当)・ 休息 | 活動のふりかえり② 閉講式 解散 | | | | | | | | |

○講師

「自然体験活動の技術Ⅰ～Ⅳ」 講師：グランストリーム代表 大瀬 志郎 氏
国立若狭湾青少年自然の家 企画指導専門職

シーカヤックで海を漕いで渡ります。スノーケリング、水中カメラで海中の生物を撮影、テント設営の方法、自然の中でアウトドアクッキングや焚き火を体験しつつ、波の音や小鳥のさえずりを聞きながらキャンプ体験をしましょう。

「活動のふりかえり①・②」 講師：やまなみ保育園園長 大森 和良 氏

無人浜でたき火を囲み、今日の自然体験、自身の自然体験や日常をふりかえり、子どもたちの自然体験や教育について語り合います。また、活動後には、本事業を通して学んだことを、参加者同士で共有する時間も設けます。

○事業の特色

事業の実施に当たって、講師の大森園長、小浜市の私立幼稚園の岩本先生、小浜市子ども未来課の中本先生と当施設担当職員2名を交えた実行委員会を6月に実施し、内容の検討する場を設けた。

これまで継続してきたシーカヤックやスノーケリングといった海の体験活動を中心としたプログラムはそのままでも構わないが、単なる体験の場とならないようにしたいと考え、体験を通して学べる内容を明らかにするための評価項目を設けることとした。全部で13項目を設定し、事前に本事業を通して学ぶ内容を明らかにするとともに、事後に参加者がどの程度それらについて学べたかふりかえる視点となるようにした。

参加者分析でも触れたが、体験を通して、学んでいく本事業のスタイルは、まさにアクティブラーニングの場であり、学校教育関係者にも参考になる内容となっていることから、積極的に広報をしてはどうかとの話があった。小浜市教育長にも相談し、校長会などで広報させてもらえるように相談をすることとした。

また、参加者が持ち帰り、教育現場で活用できる物があるとよいだろうと、お土産として挙げられるものを検討した。それぞれ教育現場を持って帰り、そこで関わる子どもたちにぜひ今回の体験を伝える際にお土産を活用してもらいたいと考えた。お土産については、参加後に園や学校などでのどのように活用したかアンケート調査を行うなどして明らかに

してみたい。

<評価項目>

- ① 自然体験に対する興味が深まった
- ② 海や自然が好きになった
- ③ シーカヤックに対する興味がわいた
- ④ スノーケリングに対する興味がわいた
- ⑤ 野外炊事やテント設営の方法がわかった
- ⑥ 自然の中で過ごすことは楽しいと思えるようになった
- ⑦ 自然の怖い面や危ない面も知った
- ⑧ 天候、気象についての関心が深まった
- ⑨ 仮設トイレを使うことができるようになった
- ⑩ 自然に対応する力が参加前よりも付いた
- ⑪ 子どもたちを自然の中に連れて行ってみたいと思う
- ⑫ 参加者同士のつながりからネットワークが広がった
- ⑬ 参加に対する満足度

<お土産>

- ① 自分が撮影した海や自然の写真
- ② 子どもたちに見せたい自然物や漂流物
- ③ 園や学校でも行える簡単な野外調理の方法（カートンドッグ）
- ④ この地域独特の観天望気の視点
- ⑤ 学校種（幼保小中高など）を超えたネットワーク

○今年度の位置づけ

参加者分析でも触れたが、これまで3年間は、幼児教育関係者を主な参加者として実施してきた本事業であるが、今後は学校教育関係者も含め、幼小・保小接続を意識して事業を実施していきたいと考えている。参加者が自然の中での体験を通して、感じたことや考えたことを共有することで、幼児教育、学校教育などそれぞれの立場の理解が深まる場となるように検討していく。

しかしながら、学校教育関係者の参加が少なく、広報に課題が残っている。学校教員の研修計画は年度の早い段階で決まってくるので、それに対応できるようにしていくこととしたい。

◆運営のポイント

行き先を阿納地区にある無人の「宮の浜」に設定し、海を渡るという体験を中心に据えている。風や波などの海の状況によっては、自然の家から宮の浜まで2時間以上かかることもあるため、キャンプ道具などの荷物を運ぶ作業船「くろさき」に伴走してもらうようにした。途中で、1名、船酔いでこげなくなってしまったので、海上でシーカヤックからくろさきにませ換え、くろさきに乘船している職員が交代してこいだ。このように職員も常にごげるような準備をしておくことで、様々な状況に対応できるようにしている。プログラムも時間をあまり意識しすぎず、自然の中でゆったりとした時間を過ごせるように、特に意識をして運営することとした。

◆安全管理のポイント

シーカヤックの講師大瀬氏からは、様々な海での経験をもとに、シーカヤックをする上での注意点や危険性について、説明をしてもらうとともに、安全に活動ができるように休憩のタイミングやルートをリードしてもらうようにした。また、今年は特に暑い日が続いているため、シーカヤックをこぎながら、首の後ろを海水で冷やすなどの工夫を伝えても

らい、熱中症に対する注意喚起も積極的におこなった。

3. アンケート結果

(1) アンケート

| 参加者 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|-----------------|--------|-------|------|------|
| 事業全体をとおしてどうでしたか | 92.9% | 7.1% | 0.0% | 0.0% |
| この事業のプログラムは | 85.7% | 14.3% | 0.0% | 0.0% |
| 日程・運営について | 92.9% | 0.0% | 7.1% | 0.0% |
| 指導・助言について | 100.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% |

4 満足 3 やや満足 2 やや不満 1 不満

プログラムについては、船酔いになってしまった参加者が、「体調不良で海に入れないのが残念でした」とやや満足という評価をしていた。また、運営については、「スタッフの方が準備しすぎの感があり、今回の自然体験をするにあたり準備や手続きなども知りたいと思った」と参加者と一緒になって作っていく事業を希望する意見もあった。「時間による余裕があり、自然を楽しむことができた」「海の魅力をたくさん感じる事ができた」「非日常の体験に満足」と参加者の多くは、満足と回答していた。

(2) 参加者の声

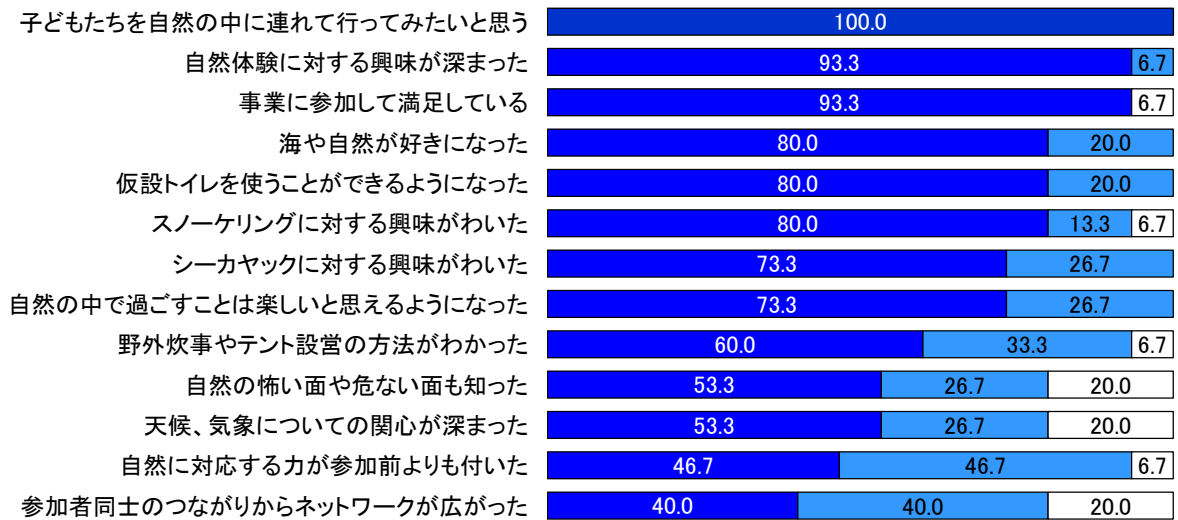
<初日のふりかえりから>

- ・ 若狭の海の素晴らしさを保育園の子どもたちに伝えなければ、海に連れていかななくてはと思っていたが、(海に面した地区の子どもたちが多いため)、子どもたちの方が海にふれていると思い直し、その海での思い出などをしっかりと聞き、海にこれだけ触れられることが幸せなのだと感じられるようにしたいと思った。
- ・ 本当に楽しくて、時間を忘れて遊びこんでいたが、「遊びに夢中になる」「遊びこむ」とはこういうことなんだと身を持って感じた。
- ・ 時間を忘れるほど夢中になるのはすごいこと、素敵なことだと思う。子どもたちが夢中になっている時間をもっともっと大切にしていきたい。
- ・ 園の周りも住宅地が増えて公園もないので、いまある環境の中で、どう自然体験をさせてあげるかをこれからの私の課題にしたい。

<事後のふりかえりから>

- ・ 自然体験の中で、海に飛び込んだり、夕方までスノーケリングをしたり、子どもに戻ったようにわくわくした。この「わくわく感」が子どもたちに関わる指導者には、とても大切なのだと感じた。自然の中で楽しむことで子どもたちにも近づけるような気がする。
- ・ 海を見るのが好きでも、海の表面しか見たことがなかった。スノーケリングをして海の中を見ることができ、一つ一つがとても貴重な経験となり、もっと海を知りたいなと思ったし、海や自然がもっと好きになった2日間になった。
- ・ 最初はやっていけるか不安でしたが、やってみると楽しいことばかりで、夢中になることが多く、海の真ん中で水面下を見た時に海がキラキラ光っていたり、洞窟の中で光が差し込んできれいに見えたり、改めて海がきれいだなと思った。先生はこんなところに行ってきたんだよ、クラゲやヒトデを触ったよ、とか子どもたちにたくさん自慢しながら、写真を見せたいと思う。

4. 成果と課題



■とてもそう思う ■そう思う □どちらとも言えない ■そう思わない ■全くそう思わない

図 事業評価アンケートの結果

(1) 成果

事後評価アンケートの項目について、「とてもそう思う」と答えた割合の高い順に並べた。参加者全員が「とてもそう思う」と答えたのは、「子どもたちを自然の中に連れて行ってみたいと思う」であった。参加者の声には、今回の体験を子ども達にも伝えたいという内容が多く見られている。言葉で伝えるたり、写真で伝えるたりすることもできるが、本事業に参加した全員が、子どもたちを自然の中に連れて行ってみたいと思ってくれたことは非常にうれしく思う。一人でも多くの指導者が、こうした思いを持ってくれることで、子どもたちの体験の機会が広がっていくことと確信する。

「自然体験に対する興味が深まった」「海や自然が好きになった」についてもほとんどの参加者は「とてもそう思う」と答えている。本事業は、ゆったりと自然の中で過ごす時間を取れるようにしている。初日の夕方は、日が暮れるまでスノーケリングしている参加者もいた。大人が夢中になって遊ぶ中で、普段気づかないことに気づいたり、新しい発見をしたりしている。また、子どもの気持ちを想像することにもつながっている。参加者の興味関心を高めるためにも、参加者自身が体験をする機会を提供することは重要であると考えられる。

(2) 課題

参加者分析でも触れた内容だが、小中学校の先生方の参加をもっと増やしていきたいと考えていたが、難しかった。広報のタイミングが遅すぎたと考えられる。年度当初には日程が決まっており、また内容も毎年大きく変えることも今のところ考えていない。より早い時期に伝わるように関係機関にも働きかけていきたい。

事業評価アンケートの結果で、「自然の怖い面や危ない面も知った」「天候、気象についての関心が深まった」「自然に対応する力が参加前よりも付いた」という3項目は、「とても思う」と答えた割合が低かった。海況も落ち着いており、天候に恵まれていた2日間であったので、怖さや危険を感じることはあまりなかった。危機管理の面からは、よい状況だけではない自然の怖さや危ない面も伝え、その対処についても伝える機会があってもよいだろう。たった1泊2日の研修では、天候、気象を読む力や自然に対応する力をつくものではない。本事業をきっかけとして、参加者自身が今後深めていってもらいたい内容であるが、全国的な取り組みでもある自然体験活動指導者（NEAL）養成講習などの情報も参加者に伝え、フォローアップやスキルアップの機会を積極的に提供できるようにしていきたい。

5. 活動の様子



【アイスブレイク】



【水慣れ】



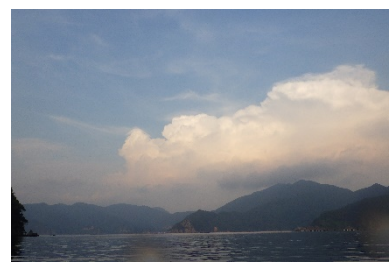
【カヤック練習】



【対岸まで漕ぐ】



【スノーケリングと釣り】



【1日目の夕暮れ】



【野外炊飯】



【夕食 カレーライス】



【2日目 朝日を眺める】



【朝食 カートンドッグ】



【帰り海の真ん中で】



【岩場からのジャンプ】